

学校経営のポイント

“人間関係力”強化向上の取組みを

若井 彌一

新学年度開始早々に、帰宅途中の女子中学生が、卒業生で交際中とみられる男子高校生に殺されるといふ事件が発生した。

典型的な“思春期犯罪”の発生

連日、新聞等で既報のように、4月21日午後6時半ごろ、岐阜県中津川市の市立中学校2年の女子生徒が、空き店舗（元パチンコ店）の3階で、高校1年生に棒状のもので頭部を殴られたうえ、首を布で絞められて殺されるといふ事件が発生した（4月22日朝刊・夕刊、23日朝刊、各紙報道）。

事件の全容解明はこれからであるが、既報の情報を参考にして、各学校での点検と対応を呼びかける。

4月22日朝刊の第一報は、各紙とも、中学校女子生徒が何者かによって殺害されたという被害者性を全面に押し出したものとなっている。

たとえば、『読売新聞』（22日朝刊）の場合、「少女また犠牲」の横大見出しと「下校時のジャージー姿」「不明2日前、不審者情報」の縦見出しで、「少女の命が、またしても無惨に踏みにじられた。（中略）現場は、かつて旧中山道の宿場町として栄えた静かな街で、住民は絶句した」というリード文に続き、「何をしても先頭に立ち、リーダーシップを発揮するタイプだった。明るくて学校でも目立つ子だったのに……」という、同中学校3年男子生徒の言葉を紹介し、さらに被害者の良好な人柄を紹介する比較的詳細な紙面構成をとっている。

ところが、同日夕刊の報道では、「知人の高1男子逮捕」（横大見出し）、「交際トラブルか」「一人でやった」（縦見出し）の見出しで、加害者の加害事実と関連情報を中心とした内容に一転している。

通りがかりの思いつきによる、見知らぬ第三者の

犯行ではなく、加害者は数年前からの交際者であった。殺害された女子生徒は、いわば典型的な思春期犯罪の犠牲者であることが明白となった。

異性に対する憧憬の念を抱き、特定の異性に対する恋愛感情をもつようになるのは、思春期の大きな特徴である。恋心を歌った文学・芸術作品（島崎藤村『初恋』など）も生まれているこの時期であるが、時として、この特徴に起因し、関連する他殺・自殺およびその未遂事件も発生する。

“他者との関係力”育成が急務

自分が好意を抱いた人が自分の行為を受け入れてくれないのは、同性・異性を問わず、楽しいことではない。それどころか、淋しく、精神的な苦痛を感じることも珍しくない。しかし、他者が自分の思いどおりの対応をしてくれない存在であることは、人生経験を積んでくれば、むしろ普通のことだと気づかされる。人はそれぞれ他者の手段的存在ではなく、それぞれが目的的存在として生きている。

このことを、具体例を示して児童・生徒に話し、自分の頭で考えさせ、理解させることに各学校では積極的な取組みをしたい。この取組みは、中学校段階になってはじめて本格的にやるのではなく、発達段階に即して、幼少の時期から開始しなくてはならない。

思いどおりにならない他者を殺害（抹殺）の対象にするという短絡的な犯行に走らない自制心の強化と同時に、現実的には短絡的犯行の被害者になることの危険を予想し、回避できる能力の向上を目指すという両面をにらんだ人間（対人）関係力育成の取組みが大きな課題となっているのではないか。

（わかい・やいち = 上越教育大学教授・附属小学校校長併任）

●3月27日刊●好評発売中！ 新年度の必備研修図書 A5判 240頁・定価 2310円 教育開発研究所・刊
長谷川元洋（金城学院大学助教授）【編】 安保和幸（弁護士）【法律監修】

間違いだらけの個人情報保護対策！ 法的視点をふまえ事例と図解で整理！

『どう対処する！ 校長・教頭のための個人情報保護対策』